とっこべとら子

宮沢賢治

おとら狐（ぎつね）のはなしは、どなたもよくご存じでしょう。おとら狐にも、いろいろあったのでしょうか、私の知っているのは、「とっこべ、とら子」というのです。「とっこべ」というのは名字でしょうか。「とら」というのは名前ですかね。そうすると、名字がさまざまで、名前がみんな「とら」という狐が、あちこちに住んでいたのでしょうか。

　さて、むかし、とっこべとら子は大きな川の岸に住んでいて、夜、網打ちに行った人から魚を盗（と）ったり、買物をして町から遅く帰る人から油揚げを取りかえしたり、実に始末におえないものだったそうです。

慾(よく)ふかのじいさんが、ある晩ひどく酔っぱらって、町から帰って来る途中、その川岸を通りますと、ピカピカした金らんの上下(かみしも)の立派なさむらいに会いました。じいさんは、ていねいにおじぎをして行き過ぎようとしましたら、さむらいがピタリととまって、ちょっとそらを見上げて、それからあごを引いて、六平を呼び留めました。秋の十五夜でした。

「あいや、しばらく待て。そちは何と申す」

「へいへい。私は六平と申します」

「六平とな。そちは金貸しを業(わざ)と致しおるな」

「へいへい。御意(ぎょい)の通りでございます。手元の金子(きんす)は、

すべて、只今（ただいま）ご用立致しております」

「いやいや、拙者（せっしゃ）が借りようと申すのではない。どうじゃ。金貸しは面白かろう」

「へい、御冗談、へいへい。御意の通りで」

「拙者に少しく不用の金子がある。それに遠国に参る所じゃ。預かっておいてもらえまいか。もっとも拙者も数々敵を持つ身じゃ。万一途中相果てたなれば、金子はそのままそちに遣わす。どうじゃ」

「へい。それはきっとお預かりいたしまするでございます」

「左様か。あいや。金子はこれにじゃ。そち自ら蓋（ふた）を

開いて一応改めくれい。エイヤ。はい。ヤッ」さむらいはふところから白いたすきを取り出して、たちまち十字にたすきをかけ、ごわりと袴(はかま)のもも立ちを取り、とんとんとんと土手の方へ走りましたが、ちょっとかがんで土手のかげから、千両ばこを一つ持って参りました。

ははあ、こいつはきっと泥棒だ、そうでなければにせ金使い、しかし何でもかまわない、万一途中相果てたなれば、金はごろりとこっちのものと、六平はひとりで考えて、それからほくほくするのを無理にかくして申しました。

「へい。へい。よろしゅうございます。御意の通り一応お改めいたしますでございます」

蓋を開くと中に小判が一ぱいつまり、月にぎらぎらかがやきました。

ハイ、ヤッとさむらいは千両函を又一つ持って参りました。六平はもっともらしく又あらためました。これも小判が一ぱいで月にぎらぎらです。ハイ、ヤッ、ハイヤッ、ハイヤッ。千両ばこはみなで十ほどそこに積まれました。

「どうじゃ。これだけをそち一人で持ち参れるのかの。もっともそちの持てるだけ預けることといたそうぞ

よ」
どうもさむらいのことばが少し変でしたし、そしてたしかに変ですが、まあ六平にはそんなことはどうでもよかったのです。
「へい。へい。何の千両ばこの十やそこばこ、きっときっと持ち参るでござりましょう」
「うむ。左様か。しからば。いざ。いざ、持ち参れい」
「へいへい。ウントコショ、ウントコショ、ウウントコショ。ウウウントコショ」
「豪儀じゃ、豪儀じゃ、そちは左程（さほど）になけれども、そちの身に添う慾心が実（げ）に大力じゃ。大力じゃのう。ほ

め遣わす。ほめ遣わす。さらばしかと預けたぞよ」

さむらいは銀扇をパッと開いて感服しましたが、六平は余りの重さに返事も何も出来ませんでした。

さむらいは扇をかざして月に向って、

「それ一芸あるものはすがたみにくし」と何だか謡曲のような変なものを低くうなりながら向うへ歩いて行きました。

六平は十の千両ばこをよろよろしょって、もうお月さまが照ってるやら、路がどう曲ってどう上ってるやら、まるで夢中で自分の家までやってまいりました。

そして荷物をどっかり庭におろして、おかしな声で外

から怒鳴りました。

「開けろ開けろ。お帰りだ。大尽さまのお帰りだ」

六平の娘が戸をガタッと開けて、

「あれまあ、父さん。そったに砂利しょて何しただす」

と叫びました。

六平もおどろいておろしたばかりの荷物を見ましたら、おやおや、それはどての普請の十の砂利俵でした。

六平はクウ、クウ、クウと鳴って、白い泡（あわ）をはいて気絶しました。それからもうひどい熱病になって、二か月の間というもの、

「とっこべとら子に、だまされだ。ああ欺（だま）されだ」と

叫んでいました。

みなさん。こんな話は一体ほんとうでしょうか。どうせ昔のことですから誰(たれ)もよくわかりませんが多分偽(うそ)ではないでしょうか。

どうしてって、私はその偽の方の話をも一つちゃんと知ってるんです。それはあんまりちかごろ起ったことでもうそれがうそなことは疑いもなにもありません。実はゆうべ起ったことなのです。

さあ、ご覧なさい。やはりあの大きな川の岸で、狐(きつね)の住んでいた処(ところ)から半町ばかり離れた所に平右衛門という人の家があります。

平右衛門は今年の春村会議員になりました。それですから今夜はそのお祝いで親類はみな呼ばれました。

もうみんな大よろこび、ワッハハ、アッハハ、よう、おらおととい町さ行ったら魚屋の店で章魚といかとが立ちあがって喧嘩した、ワッハハ、アッハハ、それはほんとか、それがらどうした、うん、かつおぶしが仲裁に入った、ワッハハ、アッハハ、それからどうした、ウン、するとかつおぶしがウウゥイ、ころは元禄十四年んん、おいおい、それは何だい、うん、なにさ、かつおぶしだもふしばがり、ワッハハアッハハ、まあのめ、さあ一杯、なんて大さわぎでした。ところがその

中に一人一向笑わない男がありました。それは小吉（こきち）という青い小さな意地悪の百姓でした。

小吉はさっきから怒ってばかりいたのです。（第一おら、下座（しもざ）だちゅうはずぁあんまい、ふん、お椀（わん）のふぢゃ欠げでる、油煙はばやばや、さがなの眼玉は白くてぎろぎろ、誰（だ）っても盃（さかずき）よごさないえい糞（くそ）面白ぐもない）とうとう小吉がぷっと座を立ちました。

平右衛門が、

「待て、待て、小吉。もう一杯やれ、待てったら」と言っていましたが小吉はぷいっと下駄（げた）をはいて表に出てしまいました。

空がよく晴れて十三日の月がその天辺（てっぺん）にかかりました。小吉が門を出ようとしてふと足もとを見ますと門の横の田の畔（くろ）に疫病除（やくびょうよ）けの「源の大将」が立っていました。

それは竹へ半紙を一枚はりつけて大きな顔を書いたものです。

その「源の大将」が青い月のあかりの中でこと更顔を横にまげ眼を瞋（いか）らせて小吉をにらんだように見えました。小吉も怒ってすぐそれを引っこ抜いて田の中に投げてしまおうとしましたが俄（にわ）かに何を考えたのかにやりと笑ってそれを路のまん中に立て直しました。

そして又ひとりでぷんぷんぷんぷんぷん言いながら二つの低い丘を越えて自分の家に帰り、おみやげを待っていた子供を叱りつけてだまって床にもぐり込んでしまいました。

ちょうどその頃平右衛門の家ではもう酒盛りが済みましたので、お客様はみんなでご馳走の残りを藁のつとに入れて、ぶらりぶらりと提げながら、三人ずつぶっつかったり、四人ずつぶっつかり合ったりして、門の処まで出て参りました。

縁側に出てそれを見送った平右衛門は、みんなにわかれの挨拶をしました。

「それではお気をつけて。おみやげをとっこべとらこに取られないようにアッハッハッハ」
お客さまの中の一人がだらりと振り向いて返事しました。
「ハッハッハ。とっこべとらこだらおれの方で取って食ってやるべ」
その語（ことば）がまだ終らないうちに、神出鬼没のとっこべとらこが、門の向うの道のまん中にまっ白な毛をさか立てて、こっちをにらんで立ちました。
「わあ、出た出た。逃げろ。逃げろ」
もう大へんなさわぎです。みんな泥足でヘタヘタ座

敷へ逃げ込みました。

平右衛門は手早くなげしから薙刀（なぎなた）をおろし、さやを払い物凄（ものすご）い抜身をふり廻しましたので一人のお客さまはあぶなく赤いはなを切られようとしました。

平右衛門はひらりと縁側から飛び下りて、はだしで門前の白狐（びゃっこ）に向って進みます。

みんなもこれに力を得てかさかさしたときの声をあげて景気をつけ、ぞろぞろ随（つ）いて行きました。

さて平右衛門もあまりといえばありありありとしたその白狐の姿を見ては怖さが咽喉（のど）までこみあげましたが、みんなの手前もありますので、やっと一声切り込んで

行きました。

たしかに手ごたえがあって、白いものは薙刀の下で、プルプル動いています。

「仕留めたぞ。仕留めたぞ。みんな来い」と平右衛門は叫びました。

「さすがは畜生の悲しさ、もろいもんだ」とみんなは悦(よろこ)び勇んで狐(きつね)の死骸(しがい)を囲みました。

ところがどうです。今度はみんなは却(かえ)ってぎっくりしてしまいました。そうでしょう。

その古い狐は、もう身代りに疫病(やくびょう)よけの「源の大将」などを置いて、どこかへ逃げているのです。

みんなは口々に言いました。
「やっぱり古い狐だな。まるで眼玉は火のようだったぞ」
「おまけに毛といったら銀の針だ」
「全く争われないもんだ。口が耳まで裂けていたからな。崇られまいが」
「心配するな。あしたはみんなで川岸に油揚を持って行って置いて来るとしよう」
みんなは帰る元気もなくなって、平右衛門の所に泊りました。
「源の大将」はお顔を半分切られて月光にキリキリ歯

を喰いしばっているように見えました。

　夜中になってから「とっこべ、とら子」とその沢山の可愛らしい部下とが又出て来て、庭に抛り出されたあのおみやげの藁の苞を、かさかさ引いた、たしかにその音がしたとみんながさっきも話していました。

底本：「風の又三郎」角川文庫、角川書店
　　１９８８（昭和63）年12月10日初版発行
　　１９９０（平成２）年10月20日８版発行
入力：土屋隆
校正：noriko saito
２００５年６月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。